様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：１２４０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2014
課題番号：２４６５２０６９

研究課題名（和文）カフカの手稿アーカイブの構造理解と復元の試み―資料管理及び編集過程の分析から―

研究課題名（英文）A Study Concerning the Archiving and Editing Process of Kafka's Manuscripts: An Attempt at Interpretation of Kafka's Works as Dynamic "Writing"

研究代表者
明星　聖子（MYOJO, Kiyoko）

埼玉大学・教養学部・教授

研究者番号：９０３１２９０９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果としては主に次の３点が挙げられる。（１）オックスフォード大学で資料調査をおこない、近年改められた目録と旧目録の差異を検討した。それにより新たな整理によって資料構造に大きな変化がもたらされていることを確認した。また、アーカイビング記録の欠落やデジタルデータの漏れも発見された。（２）批判版全集の編集者らにインタビューをおこない、現物調査の困難な個人所有の手稿資料についてさまざまな情報を入手した。（３）本研究の課題設定の根拠となった仮説に基づき、カフカ・テクストの本質的に新しい解釈も試みた。その成果を期間内に書籍という形にまとめ出版することができた。

研究成果の概要（英文）：The hypothesis tested by this project is that Kafka's novels are to be read not as static “work” but as dynamic “writing”. In other words, his creation of texts can only be understood deeply by illuminating the network of his whole writings. As an important step for the practice of interpreting his literature based on this supposition, the initial aim of this project was an attempt at a virtual restoration of the original order of the Kafka's manuscripts. After a practical investigation of the archive in the Bodlean Library at Oxford, however, it became clear that the realization of the idea was impossible, because of various lack of records regarding the archiving process of the documents. I therefore changed the orientation of the research and studied the possibilities of new interpretations of Kafka's creative texts by reading them in connection with his private writings, in order to confirm the above hypothesis. The study was successful and I have published a book as a result.

研究分野：人文学

キーワード：ドイツ文学　カフカ　文献学　アーカイブ　資料　編集

１．研究開始当初の背景

(1)カフカの手稿の物理的構造（ノートや紙片の順番や相互の関連性）については、まだ不明点が多く、手稿の大半を管理しているオックスフォード大学においても、その目録は仮のものにとどまっていた（研究を計画した2011 年当初)。1995 年から手稿を写真複製した写真版カフカ全集も刊行されているが、その刊行は遅滞しており（予定の 40 巻のうち16 年を経てまだ 8 巻のみ)、その理由も現物資料の構造把握の難しさにあると思われる。この難問に関しては、管見ではあるが、国内および国外を見ても、まだ本格的に取り組まれてはいない。本研究は、その未解決の重要課題に挑戦するものである。

(2)研究代表者は、2002 年に上梓した著書『新しいカフカ–「編集」が変えるテクスト』(慶應義塾大学出版会)で、すでにカフカ・テクストの形態上の＜危うさ＞について、問題提起をおこなっていた(本書にて第 1 回日本独文学会賞受賞)。それ以後も、ノートや紙片上の手書きテクストの検討を続け、カフカのいわゆる＜謎＞の一部が、実際にはノートのページの欠落や、あるいはノートの成立順をめぐる遺稿管理者や編集者の解釈の間違いに起因している可能性を突き止めていた。そして、さらにそれをめぐる考察から、カフカの手稿内の不可思議な欠落や複雑な構造自体が、もしかしたらカフカ本人の芸術的意図に関わっているのではないかという仮説を導き出した。

２．研究の目的

カフカが創作に使っていたノートや紙は、彼本人の手元にあった状態では、どのような構造（秩序）を示していたのか。現在の手稿のアーカイブは、過去 90 年間に遺稿管理者や編集者が何度も整理し直してきたため、その本来の状態から大きく異なる構造を示している。今回の研究では、手書き原稿の物理的な状況の調査を通して、そのいわば＜オリジナル＞の構造の復元を試みることを第一の目的とした。さらにその作業を通じて、カフカの「作品」の外形の根底的な見直しをおこなうと同時に、現物資料のアーカイビング状況が、いかにテクスト解釈に大きな影響を与えるかを明らかに示していくことも目指した。

３．研究の方法

⑴カフカの手稿が保管されている期間での資料調査

カフカの手稿は、現在その大半が、オックスフォード大学ボドレアン図書館に保管されている。この手稿アーカイブを現地調査し、その現在のアーカイビング、保管状況について全体的な理解をおこなう。

⑵カフカ学術版テクスト編集者へのインタビュー

カフカの手稿は、上記のような公的機関で保管されているものがほとんどではあるものの、必ずしもそこにあるすべての資料にアクセスできるわけではない。また現在でも個人所有のため、所在が公表されていない資料も数多くある。それらアクセス困難な資料に関しての情報を得るために、批判版編集者にインタビューをおこなう。

⑶管理用および編集用の書き込みおよび記号等の解読

カフカの草稿上には、アーカイビングあるいはテスト編集の段階に書き込まれたと思われる記号や数字が数多く見つけられる。これらの書き込みがいったい誰によって何のためになされたのかについては、判別されているものもいくつかあるが、大方はまだ不明である。本研究は、これらの数字や記号をめぐる解読を試みながら、管理過程、編集過程の分析をおこなう。

⑷手稿の物理的状況の理解がカフカ解釈に与える影響の確認

カフカの手稿の物理的構造の理解は、ひいてはカフカの創作過程の解明につながる。本研究は、その解明からさらに進んで、カフカ・テクストを根底的に新たに読み直すことを将来的な大きな目的としており、今回の課題設定はその重要な一過程として位置づけられているものである。カフカの作品とは通常の作品概念を逸脱したもの、すなわち静的な作品ではなく動的な書字と見なすべきものであることは、すでに繰り返し指摘されている。ただし、その方向での読みの実践は、管見ではあるが、さほど進められていないように見受けられる。本研究では、上記の研究作業を実施しながら、カフカ・テクストの本質的な新しい読解自体にも同時に取り組んでいく。

４　研究成果

⑴オックスフォード大学での資料調査

当初の予定どおり、平成 24 年度は、オックスフォード大学に赴き、そこで保管されているカフカの遺稿資料の調査をおこなった。

　幸いなことに、十数年来作成が続けられて手稿アーカイブの新しい目録が前年に完成され公表されたため、想定以上の範囲で研究を進めることができた。この調査による重要な知見として主に以下の３点が挙げられる。

①批判版全集掲載の旧目録とボドレアン図書館公表の新目録の差異

オックスフォード大学ボドレアン図書館に保管されている資料群は、カフカの遺族が1961 年に寄託したものであり、公的機関におけるカフカの手稿アーカイブとしてはもっとも大規模なものである。このアーカイブ

の目録は、1962 年にマルコム・ペィスリーによって暫定的かつ限定的なものが論文発表されたのち、網羅的で詳細なものは、1982 年より刊行されている批判版カフカ全集において明らかにされた。
批判版全集掲載の目録は広範に流布していたが、2011 年になってボドレアン図書館は新しい記述システムで構成された新しい目録を公表した。
今回の研究は、まずその新旧二つの目録を比較検討することから始めた。その検討の結果、（詳しい内容はここでは省略するが）驚くほど多くの差異が確認された。その差異の数は、すなわち、手稿の物理的秩序に加えられた変更の数に相当する。カフカの死後 80 年以上を経過した段階でのこれほどの大幅な改変は、想定外だった。この事実は、今回の目的（オリジナルの構造の復元）の達成が一層困難になったことを意味した。

②資料のアーカイビング段階での記録の欠落の発見
今回の研究で当初具体的な検討対象と考えていたのは、MS Kafka 34 である。MS Kafka 34 は、通称「城ノート」と呼ばれているが、それは実際にはノート（綴じられている）ではなくルーズリーフ群である。（カフカは手元にある使用途中の数冊のノートから空白頁を破り取って集めて、旅先での執筆のための急ごしらえのノートを作った）。すでに 20 年以上前に、ゲルハルト・ノイマンらにより、短編『最初の悩み』のテクストが書かれている紙 2 枚は、『城』のテクストと並行して書かれてものであり、その急ごしらえのノートの一部であったことが指摘されている。今回とくに問題視したのは、それらがノート本体とは分けて、MS Kafka 42 のアイテムの一部として保管されている点である。なぜ、それらは「分けて」保管されているのか。「分けた」のは誰か？カフカ自身か、あるいはブロートか、あるいはペィスリーか、あるいは図書館のキュレーターか？　また、それら 2 枚の紙の存在は、次のような疑問も生じさせる。もしかしたら、『最初の悩み』以外にも、「城ノート」を使って書かれた物語はあったのではないか？ これらの疑問の解決を最初の目標として取り組み始めたが、しかし、調査の結果判明したのは、カフカの部屋での段階のものはおろか、ブロートの手元での保管状況の記録ものこっていないということであった。またボドレアン図書館に到着以後の整理過程についても、何ら記録を見つけることはできなかった。

③閲覧用デジタルデータにおける欠落の発見
ボドレアン図書館では、現物資料の閲覧は非常に厳しく限られている。とくに物理的劣化の激しいものや鉛筆書きのものなどについては、原則禁止である。代わりにデジタルデータが提供されているのだが、今回最大の障害となったのは、本研究において非常に重要な意味をもつ MS Kafka 48 の資料アイテムのデジタルデータが欠けていたことである。この資料アイテムは、ノートやルーズリーフ群に添えられていた編集者によるメモ書きの集成であり、本研究が焦点を当てている編集過程の分析に関して非常に重要な意味をもつ。ただし、それらの書き物はカフカの手によるものではないため、一般的には価値がないものと見なされたのだろう。幸い現物資料へのアクセスが許されたものの、制約の厳しい状況下での検討であったため、今回の期間内では十分な解読までには至らなかった。（ただし、閲覧用のデジタルデータがないこともあって、これまで MS Kafka 48 の内実はほとんど不明だったが、今回それらが歴代編集者の手書きメモ群であることを確認できたこと自体大きな成果だともいえるだろう。）

⑵批判版編集者等へのインタビュー
①フェリスへの手紙その他書簡資料の所在
カフカ理解における彼の私的な手紙の重要性は、カフカ全集（ブロート版も、批判版も）の半分以上のボリュームが手紙で占められていることからその一端がうかがえる。ところが、それらの資料の多くは、現在も所有者が公けにされておらず、研究者による現物調査がまったく不可能な状況にある。批判版カフカ全集ではいったいどのように、手紙の校訂作業が進められているのか。まずはこの疑問を解決するために、批判版の手紙の巻の担当編集者であるハンス・ゲルト・コッホ博士にインタビューをおこなった。

②ブロート所蔵の手稿資料の重要性
カフカの最初の遺稿管理者であるマックス・ブロートが最後まで手元で保管していた資料群が、彼の秘書の死により近年イスラエルの公的機関の管理下に置かれることになった。その内容等に関しても、コッホ博士およびオックスフォード大学のリッチー・ロバートソン教授にインタビューをおこなった。（①および②ともに、現段階では公表が難しい部分もあるために具体的な記述はここでは控える）。

⑶新しいカフカ解釈の書籍の執筆
初年度に実施したオックスフォード大学での調査により、上記のような欠落が発見され、その結果当初目的の実現が非常に困難であることが判明した。それは、一面では本計画の挫折を示唆しているが、しかし別の面でいえば、今回の課題がまさに文学研究における未開拓の領域に関わるものである可能性を浮かびあがらせているといえる（記録の欠落という事実は、その記録自体の重要性が認識されていなかったことを意味している）。よって、二年目の後半より方針を若干変更して、

今回の萌芽的研究の意義そのものを自ら確認し、かつ公けにも説得的に語る作業を進めてきた（いいかえれば、上記の研究方法の(4)をより重視して研究活動の中心に据えた）。具体的には、カフカの生前刊行作品を、彼の日記や手紙といった私的な書き物と、その手稿資料自体の物理的状況まで含めて深く関連づけて読み解くことで、新たな解釈を提示することを試みた。スピンオフともいえるこの作業は、実際に進めていくにつれ予想外に順調に大きな成果につながり、最終年度のうちに書き下ろしの本にまとめて出版することができた。

(4)新たな研究課題の設定
スピンオフ的な書籍の執筆の過程で深めた考察によって、幸いにも資料構造の問題についてこれまでとは異なる視点を獲得し、当初の問題設定を若干ずらしたところにひとつの謎を解く鍵があることも発見できた。その新しい課題、簡単にいえば資料構造の時間軸の解明からテクスト理解にいたる道筋の有効性を確認すべく、最終年度の８月に再度オックスフォード大学で調査を実施した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
① 明星　聖子、カフカ研究の憂鬱、貴重書とパラテクスト（慶應義塾大学出版会）、査読無、2012、pp.3―29

② 明星　聖子、境界線の探究―カフカの編集と翻訳をめぐって、文学、査読無、13巻、2012、pp.112―126

〔図書〕（計１件）
① 明星　聖子、慶應義塾大学出版会、カフカらしくないカフカ、2014、277

６．研究組織
(1)研究代表者
明星　聖子（MYOJO, Kiyoko）
埼玉大学・教養学部・教授
研究者番号：９０３１２９０９